

# 全国市街地の変遷

## 昭和の記憶から次代へ

### 開港で外国人居留地に

山下町は江戸末期の開港で外国人居留地となつてから市街化が進み、何度も「まち」の様相を変え現在に至る。歴史を紐解くと幕末の様式建築の商館やホテルが次々と建てられ、明治時代に入り貿易の港町として栄えた。山下町を中心とする山下居留地は、商社、ホテル、洋服店や貴金属店等の洋館や櫛包屋、鍛冶屋、印刷

屋も多く、ジャパンプライムズもここに始まった。(参考文獻「横浜・中区史」にある明治女性の世界一周日記)「まち」の様相が大きく変わる1回目の契機は、1923年の関東大震災だった。海岸通りにあったオリエンタルホテルやチャータード銀行などが象徴的な建物の多くが震災で崩壊し、町は壊滅的な被害を受けた。その後、震災復興事業により震災の瓦礫で埋め立て造成された山下公園が27年に竣工。開園したほか、当時横浜で最大規模を誇った外国人向けのグランドホテルが同年、山下公園の正面でニューグランドホテル(現ホテルニューグランド)として復活を遂げ、両者は復興のシンボルとなった。同時に土地区画整理事業も行われ、復興速度は早まった。同時期に欧米人の多くが海外に避難し商社の再建が遅れ

たことなどが影響し、震災跡地には35年頃まで空き地が点在した。2回目の契機は45年に30回近い空襲を受け、8月15日の終戦を迎えると、翌9月マッカーサー連合国軍総司令官一行が、奇跡的に焼失を免れたニューグランドホテルに3日間宿泊。その後、米軍高級将校や婦人部隊の将校のクラブ、食堂、宿舎となった。終戦後、山下町の大半が接収されたが、中華街

建物が混在する街並みが形成されるようになった。75年以降は、外国人商社を解体した跡地にシルクセンター国際貿易観光会館や産業貿易センターなどの近代建物が次々と建築され、現在に至る。

## 震災復興のシンボル「ニューグランド」 新旧混在、千変万化の「まち」

### 大型クルーズ船も

は接収されることなく早々に復興が進んだ。さらに50年の朝鮮戦争が勃発すると、戦場からの復員者やこれから戦場に行く者ら米軍兵士の往来でバーやキャバレーが建築され、町は繁盛した。その後、接収は徐々に解除され、ニューグランドホテルは52年に、山下公園は60年に全面解除された。

その後、61年に地上106階のマリントワーが竣工する一方で、70年に旧アメリカ銀行、翌71年に旧アメリカ領事館が取り壊されるなど、新旧

## 横浜市・幾度も変遷を経た中区山下町



④山下公園からホテルニューグランドを望む。左手はマリントワー ⑤ホテル入り口前の歩道。外国人の姿も多い



空襲で奇跡的に焼け残ったホテル(写真提供協力: 原地所(株)常務取締役、野村弘光氏)